

## 尾瀬の植物の“いま”

吉井広始 尾瀬保護専門委員

### 1. 尾瀬の日本における位置

本州中部山岳は、約 300 万年前(後期鮮新世)以降に 2000m 以上の標高をもつようになった。尾瀬ヶ原の形成開始年代は約 7800 年前と推定されている。約 8000 年前に対馬海流が日本海に流入し、列島の日本海側に多雪気候をもたらした年代と一致する。一方、アヤマ平や横田代、鬼怒沼湿原などの山地湿原の形成開始年代は、それより 1000 ~2000 年ほど遅れると推定されている。

日本列島の西側で中国大陸との間に陸橋が形成されたのは、約 120 万年前、約 50 万年前、約 30 万年前と考えられている。北海道と千島やサハリンとの陸橋は、約 30 万年前と最終氷期後半と推定されている。尾瀬は、その両サイドの丁度中間に位置し、北から進入した植物と西方から進入した植物の交差点でもある。

### 2. 分布する植物のいま

日本のフロラ(植物相)は日華区系に属し、主に東シベリア、中国大陸、朝鮮半島、また遠くヒマラヤに至る地域に共通分布する植物群から成り立っている。現在までに、尾瀬地域所産の維管束植物は、119 科 397 属 840 種 1001 種内分類群の自生が知られている。尾瀬地域における日本固有種は 79 科 382 種(46.3%)に及び、中でも日本海要素が 50 科 136 種を占める(16.3%)。北方系の植物群は、46 科 129 種で全体の 15.6%を占め、海拔 2000m を超えるピークをもつ山が少ないにもかかわらずこれだけまとまって遺存しているのは、尾瀬が間氷期のレフュージアとして働いたことの証といえる。大陸関連要素 70 科 257 種(31.2%)ある。そのうち 132 種(16.0%)は、朝鮮北部から中国東北部、アムール・ウスリー地方に分布する種群である。

### 3. オゼソウのいま

オゼソウは、雌しべの柱頭が癒合せず分離したままの古い形質をもつ。日本固有種であり世界に類縁がない。近年、分子系統解析によりオゼソウ(ユリ科オゼソウ属)は腐生植物のサクライソウ(ユリ科サクライソウ属)と姉妹群であることがわかり、この 2 属からなるサクライソウ科が広く認められるようになった。オゼソウは、本県の至仏山と谷川岳、北海道の天塩山地にのみ分布している。蛇紋岩地遺存種として知られ

るが、谷川岳には蛇紋岩地から隔離した流紋岩上にも群落をつくっており、必ずしも蛇紋岩が生育の絶対条件ではないことを示唆している。化学的条件よりもむしろ水分や礫など立地上の物理的条件が重要と考られるが、詳細は依然不明である。

#### 4. 尾瀬の保全のいま

人為によってできた裸地の復元は40年以上にわたって取り組まれてきた。アヤマ平の現状を報告する。また、至仏山登山道の荒廃もまた植生への影響が甚大になり、膨大な修復作業が続けられている。尾瀬のニホンジカは1995年から確認されるようになり、今や36科69種の植物が摂食され、踏みつけやぬた場などの攪乱、特に針葉樹の皮むきによる立ち枯れ被害が拡大している。早急な頭数調整が必要である。

**キーワード：**尾瀬地域のフロラ、オゼソウ、登山道の荒廃、植生復元、シカの被害